

緑ネット通信 No.79

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090-2935-9444

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

松戸のみどり再発見ツアー報告

「歴史あるみどりをつないで初詣 ～七福神と富士山も～」

藤田 隆



1月11日25人の参加者は近隣の方も多かったが、「近所にも、よく知らない道があるかもしれませんね」と言ってスタートした。

本土寺では本堂にお詣りした後、ムクロジの木の実を拾ってペットボトルに入れて攪拌し、泡の出る様子を見てもらった。昔は洗濯に使っていたのだ。境内は樹木が多く、アジサイの冬芽、青々とした竹林、常緑樹の葉の輝きなどを楽しんだ。

医王寺への道の街角に青面金剛碑が立っていた。側面を見るとかすかに流山道と書いてあるように見えた。道しるべの役割を果たしたのだろう。並んで立っていた聖徳太子碑は職人仲間の講の名残とか…。いずれも宅地整備と相俟って整理統合されたのではないかと想像した。

医王寺は真言宗豊山派のお寺で松戸七福神の毘沙門天、江戸川八十八カ所巡り第76番札所、六地藏、稲荷神社を祀る。お詣りし、その後富士山展望ポイントへと急ぐ。目を凝らすと、うっすらとはあるが、山頂に雪をいただいた姿が浮かんで見えた。

農家の高垣が残され、ヒノキの垣根が続く道を行ったところの広徳寺は曹洞宗。松戸七福神の弁財天を祀る。戦国時代の高城氏の墓所から富士山が見えることでも知られている。

次に訪れた大谷口歴史公園は高城氏が築いた小金城の一部で、東葛地域を支配していたが、豊臣秀吉の関東攻めで開城した。当時、敵の来襲防御として作られた空堀・障子堀の跡が残されていた。階段を上った先には番場が広がり今では公園の広場になっていた。現地の看板を見ると、低地に空堀、高い場所には番場・本城を置いて、入り組んだ地形をうまく利用していることが分かった。

たまたま参加していた、公園のボランティアをしている方に伺うと、低地部分は空堀あるいは水をたたえる堀で、簡単に城に入れない構造だったそうだ。達磨口から空堀を歩きながら、大手口、水をたたえていた堀を説明してもらい、慶林寺に向かった。本寺は高城氏の妻が出家して庵を建てたのが始まりとされ、曹洞宗の寺院。松戸七福神の寿老人を祀っている。

お詣りを終えて一人一人に訪ねてみた。「普段行けないところが回れた」「楽しかった」などの感想が聞けた。



ココは北総台地の西のはずれ
 晴れた日には遠く富士を望む



拝見！ とんりの里山活動【流山市編その2】

緑のネットワーク・まつど 高橋 盛男

前回に引き続き流山市を取り上げます。同市の里山活動のはじまりと、前回紹介した「里山ボランティア流山」とのかかわり、その後の展開などを紹介しましょう。

市野谷の森から始まった流山の里山活動

「里山ボランティア流山」（通称：里ボ）が、里山ボランティア養成講座の修了生により、2011年に結成されたことは前回述べました。この講座を主導したのは「NPOさとやま」ですが、その母体である「流山自然観察の森を実現させる会」（以下「実現させる会」）の取り組みが、同市における里山活動（樹林地保全活動）のはじまりといえるでしょう。

「実現させる会」は、市野谷の森を残す活動を展開した団体です。市野谷の森は、現在「おおたかの森」の名で知られる樹林地です。元は約50haの森でしたが、つくばエクスプレス建設にともなう周辺の再開発計画で、失われようとしていました。

当時、絶滅が危惧される猛禽として、レッドデータブックに記載されたオオタカの繁殖が、市野谷の森で確認されたのが1993年。そして同年、「実現させる会」が結成されます。同会を中心とする保存活動の高まりにより、1999年に市野谷の森は半分の約25haを県立公園として残すことになりました。現在の森の愛称も、最寄り駅の名称も、このできごと由来しています。



無農薬無化学肥料の畑作業や収穫は、親子会員の大きな楽しみ。里ボ育ちの年上の子どもが小さな子どもの指導をしたり見守ったり…
(写真は2月26日活動日 提供は里ボ)



里ボが清掃の委託を引き継いだ西初石小鳥の森。中に大きな池（湿地化している）がある。

団体を設立するも予定の活動場所を失う

里ボの代表、生方康之さんが里山活動に入ったのは、恵良好敏さんとの出会いがきっかけでした。恵良さんは市野谷の森の保存活動を主導し、NPOさとやま（2002年設立）の代表も務めていました。

「彼に誘われてNPOさとやまの理事になり、養成講座の運営も担当しました」と生方さん。講座の終了後は里ボの設立を手伝い、事務局局長を務めることにもなりました。ところが……。

「この講座は、市野谷の森が県立公園になったとき、その維持管理者を養成する目的で開講されました。なのに、県立公園化が見送られて、私たち里ボは活動の場を失うはめになったんです」

しかし里ボ設立の年、流山市みどりの課の仲介で、芝崎小鳥の森の植生管理および調査にかかわらせてもらえることとなり、活動のスタートを切りました(2017年にこの森での活動は終了)。その後も、伊藤家の森、大畔の森とフィールドが増えていきました。

また、西初石小鳥の森は、NPOさとやまが市から受託していた清掃業務を生方さんが引き継ぎ、さらに2020年に里ボに受託が引き継がれるかたちでフィールドのひとつに加わっています。

一方、里山講座は現在「みどりの保全ボランティア育成講習会」として市が主催し、4日間のプログラムで毎年開催されています。子ども連れでも受講できるのが、松戸の講座にはない特色です。

親子会員が増えたはいいが困ったことが……

里ポの活動に、働き盛り、子育て盛りの若い世代が数多く参加していると、前回伝えました。そのうらやましい状況は、どのようにして生まれたのでしょうか。生方さんは「森のイベントの対象を、親子にしたことがひとつ挙げられる」と言います。

「子ども対象だと、親もついて来るが暇をもてあます。親対象だと子どもが楽しめない。だから、うちのイベントはすべて親子で楽しめるものになっています」

もうひとつは、若い世代の情報発信力。口コミやSNSで森体験が伝え広まっていくのです。それで会員も増えていきました。けれども「少し困ったことも起きてきた」と生方さんは言います。

「イベントを楽しんでくれるのも、会員が増えるのもいいのだけれど、その人たちがわれわれ本来の活動の戦力に、なかなかならないんですよ」

つまり、イベントの参加が、森の維持管理活動の参加に直接的につながらないまま、会員数が増えていったということ。そのため今は、新しい親子の入会希望に応えきれない状況になっていると言うのです。

一方、親子会員の増加を受けて、生方さんは数年前から、若手会員による事務局づくりに乗り出しました。作業にも熱心に取り組む人たちを軸に、作業以外の森のお楽しみを、若手が自発的に企画・実施できるように運営体制を整えたのです。

それが功を奏しました。事務局長の岡本さんを含む6人の事務局メンバーを中心に、親子会員が生き生き伸び伸びと活躍する風景は、そうして描き出されてきたのだそうです。

大畔の森を訪ねて、里ポには 松戸の里山活動団体にも参考になりそうところが、まだいろいろとあるように感じました。また訪ねてみたい森です。

松戸里やま応援団「いいなの会」 今とこれから

いいなの会代表 瀧上 和宏

「松戸里やま応援団 いいなの会」(以下「会」という)の活動する「大作の森」(以下「森」という)は、みのり台駅から徒歩15分の市街地に立地している。

2021年5月の活動開始から、主として森の整備作業と植生調査を行ってきた。

整備作業として、危険木や不要な低木の伐採、枝葉の切り落とし・整理、森内や周辺の除草、散策路の整備等を行ってきた。その結果、荒れて人の立ち入れない森から散策できる森に変わりつつある。整備作業は地道な作業であるが、着実に進めている。

植生調査は知見を有する会員を中心に行っている。

その結果をどのような森にしていくかの検討のベースとする。

今後は整備作業を継続するとともに、次のような活動をしていきたい。

まず、活動の内容についてである。森は住宅地にあり、近隣は直接または通学路をはさんで住宅と接している。このような立地環境であることから、地域コミュニティに根差した森にしていきたいと考えている。

そのために、住民の方への広報(作業やイベントに関するチラシ配布等)を継続しつつ森に対する要望を聴く機会をつくっていく。



一方、この森は平坦な地形であることや植生などから生物多様性保全機能、保健・レクリエーション機能（散策、交流等）、文化機能（自然観察等）の発揮が期待できる。

これから、住民の方の要望と森が発揮できる機能をすり合わせながら、誰のためにどのような価値を提供する森にしていくかという目的を定め、その実現に向けて活動していく。

次に、活動の進め方についてである。会の活動記録には、全会員が輪番で自由な思いを記入する「コメント」欄を設けている。”今日も達成感、爽快感など感じる楽しい一日でした”、”以前は特別気にもかけなかった森の景色とか気になるようになってきました”が最近の記入の実例である。会員が「コメント」欄に書きたくなるような、楽しい経験ができ、新たな発見があるような活動にしていきたいと考えている。

こんな活動ありました（活動報告より）

- ・金ヶ作野中の森でナラ枯れ枯損木の伐採を応援団技術・安全部会が対応（12.15）
- ・関さんの森にこども園園児訪問（12.7, 1.24, 2.9）、小金北小3年生が昔の暮らし道具見学に訪問（2.21）
- ・ミニ門松づくり：野うさぎの森、秋山の森、三樹の会など



・しんやまの森に園児訪問（2.22）

・囲いやまの森で子どもとまつどの「森で遊ぼう！」

～しぜんのコラム 54～

クイナとヒクイナ

現在、地球史上6回目の大量絶滅が進んでいると言われている。一方で、都市部では開発により生き物たちの生息環境が大きく失われたが、松戸市では豊かな生物相が残された千駄堀地域を、自然尊重型の都市公園「21世紀の森と広場」として整備した。

21世紀の森と広場では、現在もレッドリストに掲載されている野鳥が認められている。みどりの里では、昨冬からヒクイナ（千葉県・最重要保護生物）が高頻度で目撃された。今冬もヒクイナは健在で、さらにクイナも目撃されている。クイナは、千葉県では「消息不明・絶滅生物」になっているから、これが松戸で見られるというのは、すごいことである。



クイナ 2023.2.27 21世紀の森と広場

さて、クイナやヒクイナが今後も見られるといいのだが、それは難しいであろう。理由は、公園の整備や維持管理が、生き物に配慮せずにおこなっているからである。クイナ・ヒクイナに限らず、野鳥は警戒心が強いが、最近では草刈りや剪定が過剰におこなわれている。特に千駄堀池や野草園では、ヨシ、マコモ、ネザサなどが大量に刈り取られ、見通しが良くなった。このことは、野鳥が安心して暮らせる場所が減っていることを意味する。野鳥減少の理由は、公園の維持管理だけではないが、「自然尊重型」という理念は、今後も持ち続けてほしいものである。

（山田純稔）

★松戸のみどり再発見ツアー61（観察学習会No.77）★新型コロナウイルス関連で中止になる場合がございます。事前にご確認ください。

「市境に残る豊かな自然を訪ねる」

松戸市との市ざかい、市川市の消のえゆく森を訪ね、残され守られている長田谷津の自然も楽しめます。

4月16日（日） 9:30～12:30（小雨実施） 参加費300円（会員は100円）

集合 北総線大町駅改札口 9:30集合 持ち物 飲み物、帽子、マスク

申込み・問合せ：090-4078-3703（藤田4月1日から受付開始 18時以降）※申込制・先着30名

その他 歩きやすい服装でどうぞ お天気が良ければお弁当持参がお勧めです

OF 特集号

緑ネット通信 No.80

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
年会費：1000円
口座番号：00170-9-696174
連絡先：高橋盛男 090-2935-9444

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

第11回 オープンフォレスト in 松戸

薫風さわやかな季節、今年も5月13日から21日の期間に開催されました。天候に恵まれない日もありましたが、のべ1672名の市民がまつどの森を楽しみました。



5月の森は みどりがもりもり 空気もおいしい 公園とは違って草もいっぱい、生き物もいっぱいです



オープンフォレストやってます!
ようこそ! 森はここですよ~
この森の自然の写真も見てね!
横断幕を設置したり、掲示物を準備したり、
スタッフは早朝から準備に余念がありません。



受付で 可愛い羊がおでむかえ



「7月には このあたりにヤマユリが咲きます」



「ねえ、ママも一緒に乗ろうよ!」
手作りハンモックは どの森でも大好評



森での活動の先輩、ボウイスカウトの指導で、森にやさしい焚火で焼きマシュマロ



長男、次男は竹馬、末っ子は竹ぼつくり挑戦

薬医門の前では、関さんの森・古文書の会スタッフが、関家に残る古文書について解説します。これまでに調査・分類した古文書は約3500点。今もこの作業は延々と続いています。



雨模様でも、タープの下で楽しいひと時



クラフトコーナーでバッタ作り



カストムシの幼虫
「おおきいね～」



近隣の幼稚園児もやってきた



「この人形、よくできてう～」



子どもに人気の 折り紙童話



ハイジのフランクは格別!



根木内歴史公園のたんぼでは、小雨模様の中子どもたちが泥んこで田植えを体験しました。



お帰りの前に、アンケートにシール貼ってね。来年も開催できるように、楽しかったら募金もお願いしま～す

OF フレッシュ企画 再発見ツアー-61

市ざかいに残る豊かな自然を訪ねる

藤田 隆

4月16日参加者15名、スタッフ7名（市職員含む）で松戸と市川の市境の森を訪ねました。北総線大町駅から梨街道を西へ、10分足らずで到着した「大町教育の森」は太陽に照り輝いていました。

深呼吸をしてから3班に分かれて、各所に置かれた植物写真のパウチを見ながら観察しました。ヤマユリやヒトリシズカ、キンラン、アマドコロなどの野草が多く、この辺りでは希少なミツバウツギも咲いていました。

この森は、北千葉道路建設工事のために数年後には無くなってしまふ運命・・・博物館に相談した結果、希少植物を近隣の同様の樹林地に移植する動きも始まっているとのことでした。

次に訪れた大町公園は地元有志の働きで自然豊かな谷津が市の公園になった場所で、尾瀬などの木道をほうふつとさせる景色です。「この水はどこから流れてくるの？」と参加者からの質問に、台地上の梨畑にしみ込んだ雨水が湧水となっていることをお知らせしました。藤の蔓が樹木の上の方に向かって伸びている場所で「藤蔓はどうやっててっぺんまで登ったのでしょうか？」などのクイズも。

「天気良くなってきた、虫も出てきた。気分よく観察出来た。」「開花している植物が予想以上にあり、楽しかった。」などの感想をいただきました。



大町公園で全員集合

OF 企画 再発見ツアー-62

金ヶ作 バラのお庭と森めぐり

藤田 隆

5月19日、前日の雨が上がり、少しどんよりとした曇り空の下、新京成線常盤平駅には19人の参加者が集まりました。今回のツアーは（公財）松戸みどりと花の基金との共催です。花壇コンテストがきっかけで本格的にバラを育てていらっしゃる方のお庭を見せて頂けることになり、お庭に加え公開中の里やまの森を訪ねるものです。タイトルが女性の目を引いたのか女性の多い華やいだ雰囲気となりました。



ヒガンバナで有名な祖光院のみどりを通り抜け、80種類のバラが咲き香る「バラのお庭」に向かいました。バラの管理をしている打出さんから無農薬、省農薬に心がけていることや、管理のコツなども教えていただきました。金ヶ作自然公園を通り、三吉の森や立切の森を紹介した後、野中の森で一休みし育苗圃の花を堪能しました。最後の訪問地 囲いやまの森の中にはブランコ、ハンモックが設置され、野口さんのコカリナにあわせて皆さんで懐かしい歌を歌う素敵な時間もありました。

「旅に出た時のような気分が味わえた」などと喜んでいただきました。

総会の報告

昨年は、みどりに触れる機会も増え、昨年度の再発見ツアー10月の戸定邸では復元工事のこぼれ話、1月は大谷口歴史公園のボランティアの方から城の成り立ちの話など、予定より豊かなツアーができました。今年度は4月の再発見ツアーに続き、5月には松戸みどりと花の基金と共催で金ヶ作のバラのお庭をめぐる新しい試みが始まりました。今年度もよろしくお願ひします。 代表 藤田 隆

★松戸のみどり再発見ツアー（観察学習会）No.63

次号通信(9月発行予定)を再度確認ください。

「松戸のシンボル矢切の斜面林から里見公園へ」

10月15日(日)(予定)9:30~12:30 (小雨実施) 参加費300円(会員は100円)

集合 北総線矢切駅 改札口 9:30集合 持ち物 飲み物、雨具(解散後のお弁当は自由)

申込み・問合せ: 090-4078-3703(藤田 18時以降) その他 歩きやすい服装でどうぞ

※参加は申込制・先着30名 (10月1日より受付)

緑 ネット通信 No.81

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000 円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090- 2935- 9444

都市の緑を残すには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は「みどり」、特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携し、その輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

ぷらっと 子どもの森 はじめました

子どもたちが自由な発想でみどりと触れ合える機会をもっと

まつど暮らしの森会議 ぷらっと子どもの森グループ 野口 功

子どもたちに森で気楽に過ごすひとときを

松戸で「ぷらっと 子どもの森」という新しい試みが始まりました。「気軽に ぷらっと行って遊べる森」—そんなイメージで名づけられました。まだ「いつでも」とはいきませんが、1~2カ月に一日、常盤平駅北口近くの「囲いやまの森」で行われます（開催月の第2日曜日、午前10時~午後1時。雨天の場合は翌週の日曜日）。

遊具は、長大ブランコ、木登りネットくらいしかありませんが、里やまボランティアのベテランたちが、森での過ごし方や遊びをいろいろとアドバイスをしてくれます。虫探し、木や竹切り体験、森の工作や探検などなど。これからの季節、森の中でゆっくり過ごすのも快適です。

増えてきた子育て支援団体と里山活動の連携

松戸は、街中のあちこちに小さな森がありますが、十分管理しきれていないのが実情です。それを素敵な自然空間によみがえらせるのが里やまボランティア活動。その輪が広がっています。

さきがけは 1995 年に活動が始まった関さんの森。2004



年からは里やまボランティア入門講座の修了生による里やま活動団体が次々に生まれ、「松戸里やま応援団」として連携した活動を展開しています。

2012 年には、整備した森をいっせいに市民に公開する「オープンフォレスト in 松戸」が始まり、以降は毎年春の開催で 11 回を数えています。身近な森で自然を体験できると好評で、春の 1 週間だけではなく、もっと機会を増やしてほしいという希望が、参加者から寄せられていました。

また、NPO 法人「子どもっとまつど」の「森であそぼう」プロジェクトも、いくつかの森で毎年行われてきました。こうした積み重ねを経て、2020 年 11 月には、子育て支援など多数の市民団体と里やまボランティア団体が連携した森の開放イベント「第 1 回 あそびの森」が開催されるまでに発展してきました。

「暮らしの森会議」と「ぷらっと こどもの森」

こうした活動が 2021 年、県が主催する「第 1 回 ちば里山アワード」で最優秀の里山大賞を受賞しました。

それを機に里やま応援団は、講演会「つなごうよ 森と地域と子どもたち ~自然のなかではぐくまれるもの~」を



開催し、都市の森をいっそう活かしていく道を模索してきました。さらに、他分野の市民団体や学者・研究者、行政などと一緒に都市の森のこれからについて考える場として、今年4月に「暮らしの森会議」が発足しました。

その話し合いの中で、
「年1回のオープンフォレストだけでは、そのとき限りで終わっちゃうのが惜しい。森への親しみもふだんの暮らしになかなかつながっていかないよね」「もっと森と気軽につきあってもらえる機会を増やしたいな」

という意見に多数のメンバーが賛同。そこからスタートしたのが「ぷらっと 子どもの森」です。決まったスケジュールやプログラムを用意するのはあえてやめよう。子どもたち、親子で「ぷらっと」立ち寄って、自由な発想であそべる森がいいのではないか—— イベント名もそんなイメージから付けられました。

まだ始まったばかりの「ぷらっと 子どもの森」。これからどのような姿に育っていくのかを楽しみに、森が好きな仲間たちと続けていきたいと思えます。

さようなら 秋山の森

里やま応援団の共同運営による 14 年の活動に終止符

緑のネットワーク・まつど 高橋盛男

「保全と活用の連携」では先駆的な森

「あそびの森」や「ぷらっと 子どもの森」、幼保園児の自然体験に小学生の校外活動……、緑を楽しむ子どもたちの姿が松戸の森に増えています。しかし一方、市内の緑地、特に農地と樹林地は相変わらず減る傾向にあります。

そうしたなか、およそ 14 年間にわたり続いてきた「秋山の森」の活動が、今年 5 月末をもって終了。関係者による「秋山の森お別れ会」が 6 月 24 日に開かれました。また、森の閉鎖にともない、秋山の森をフィールドとして利用してきた「Save The Green@Akiyama」(以下、STGA)も活動を終えることになりました。

秋山の森の活動は、里やまボランティアの存在を知った地権者が、住宅跡地に残る屋敷林の整備を望んだことがきっかけでした。その申し出に応える目的で「松戸里やま応援団(以下、応援団)」ができ、秋山の森を整備してきました。そして、子育て世代のグループが立ち上げた STGA がその活動に参画し、多彩なイベントを繰り広げながら、秋山の森に若いファミリー層を呼び込んできました。

片や保全の担い手の応援団、片や森の活用のアイデア豊富な STGA。この相互補完型の連携は、松戸の里山活動のなかでも先駆的な取り組みでした。

ぜい弱な里やま活動フィールドの担保性

なぜ、秋山の森の活動に終止符が打たれることになったのでしょうか。それは森の地権者が、惜しみながらも土地の売却を決めたからです。しかし、それは苦渋の決断でした。秋山の森の地権者は、自ら応援団を受け入れたように、里山の活動には理解を示していた方です。応援団との関係も良好でした。けれども他方で、この森は近隣の一部から寄せられる苦情が絶えない状況も長く続いていました。

そうした苦情が寄せられる度、矢面に立たされてきたの



上/関係者 30 名余りが集まったお別れ会。右/お手製のピザ窯も最後のご奉公。(写真:小川忍)



が地権者です。以前には、林縁にあったケヤキの伐採を余儀なくされたこともあり、苦情対応で地権者にかかる経済的な負担も、相当に大きなものでした。

フィールドの喪失を残念に思いながらも「その心労のほどはよく理解できる」と、秋山の森の代表を務めてきた野口功さんと松田明光さんは言います。

確かに今回のできごとには、やむを得ないところもあると思います。ただ、気になるのはこの事例が示すように、里山活動のフィールドそのものの担保性が、現状ではきわめて低いことです。他の応援団のフィールドでも、相続などを理由に土地が売却された例があります。

毎年、里やまボランティア入門講座などにより、里山仲間は増えますが、その活動フィールドの継続性が保たれなければ、同じようなことが今後も起こり得る可能性が高いのです。「みどりの市民力」を保管する新たな制度づくり。「みどりの行政力」の発揮が急がれます。

幸谷放課後児童クラブ
初めての竹ぽっくりづくり
市立幸谷小学校

8月22日、幸谷放課後児童クラブで竹ぽっくりづくり。1年生～5年生の学童71人の指導にあたったのは、里やま応援団 森の利活用部会の呼びかけに応じた17人の応援団メンバー。竹ぽっくりをつくるのが初めての子もいれば、のこぎりを使うのが初めてという子たちも。でも、これが楽しくないわけがない。竹切りの次はドリルで穴開け。ちょいと緊張しながらも心はワクワク。皆さん、ケガもなく上手に竹ぽっくりを仕上げると、わいわいがやがや、にぎやかに遊んでいました。



2023
里やまの夏やすみ
子どもも大人も
楽しさいっぱいの夏

Let's 体験!!
三吉の森、野うさぎの森などで
里やまボランティア体験

三吉の森では8月5日、野うさぎの森では同月2日と16日、関さんの森では同月6日、今年も「レッツ体験!!」の受講者が里やまボランティア体験に訪れました。「レッツ体験!!」は、まつど市民活動サポートセンターが青少年を対象に開いているボランティア体験講座。三吉の森では中学生1名、野うさぎの森では中学生2名と高校生、大学生が各1名の参加。関さんの森では中学生4名が参加。森の観察から竹や雑木の伐採など整備活動のほか、三吉の森では竹工作や藍の葉のタタキ染めの体験も。参加証を手にした皆さんは、ご満悦の表情でした。(写真は三吉の森)



河原塚南山自治会
グリスロで来た子どもたちと森遊び
野うさぎの森

8月23日、野うさぎの森に、河原塚南山自治会の子ども16人と大人9人が、グリスロに乗ってやってきました。グリスロとは、「グリーンスローモビリティ」の略称。時速20km未満で走る電動車を使った公共交通。松戸では小金原地区と河原塚地区に導入されています。森に訪れた子どもたちは、竹切りに挑戦した後、バトミントン、ブランコ、ハンモックなどに興じ、さらに切った竹を使い、藤田さんの指導でリズム遊び。最後は藤田さん作詞作曲の「野うさぎの森の歌」を全員で大合唱。濃密な里やま体験に、自治会の方から感謝の言葉をいただきました。



親子23名が参加
森の生き物さがしにワクワク
虫と遊ぼう in 溜ノ上の森

小さな森でも、そこは生き物たちの楽園。7月28日に開かれた「虫と遊ぼう in 溜ノ上の森」は子ども12名、大人11名の参加でにぎわいました。目をこらさないと見つからないゾウムシの仲間や寄生バチの繭などを発見。ノコギリクワガタのオスとメスを捕まえた子もいれば、ニホントカゲやニホンカナヘビとの遭遇も。身近な自然に生きる命との貴重な出会いでした。



里やまボランティア入門講座 2023 今年は土曜日に開催

21 回目を数える「里やまボランティア入門講座」。例年は平日に開講されていましたが、今年度は土曜日の開講となりました。週末ならば、若い世代の参加も見込めるのではないかと期待からの試みです。日程は受講者が自由に里やまボランティアが活動する森を訪問する期間も含め 10 月 14 日から 11 月 18 日までの 5 日間。松戸の森仲間、また増やしたいですね。

- 10 月 14 日(土)「里やまって何だろう?」「森の観察」
- 10 月 21 日(土)「行政と松戸のみどり」
「里やまボランティアって?」「森の観察」
- 10 月 28 日(土)「都市の緑の役割」
「里やまで何したい?」
- 11 月 11 日(土)「森を楽しもう」
「安全講義・作業体験・工作体験」
- 11 月 18 日(土)「里やま保全活動の原点「関さんの森」」
「里やま体験を振り返る」

この秋も、親子で森を楽しもう あそびの森 囲いやま

2020 年に「あそびの森 in 囲いやま」として第 1 回が開催された「あそびの森」。今年も囲いやまの森で 4 回目を開催します。里やま活動団体のみならず、子育て支援団体をはじめ、多彩な活動グループのコラボレーションによる、いわば秋の森の文化祭。今回は、囲いやまの森の向かいにある金ケ作育苗圃を第 2 会場として「松戸みどりのフォーラム」も同日開催されます。

- 日時 11 月 19 日(土) 10 時~14 時 30 分
- 場所 囲いやまの森/金ケ作育苗圃
(最寄り駅: 新京成線常盤平駅)
- 主催 あそびの森実行委員会
- 問い合わせ・申し込み (要事前申し込み)
NPO 法人 子どもっとまつど ☎047-344-2272

~しぜんのコラム 55~

ツミの早朝の餌はコウモリ

今年の夏、自宅から歩いて行ける公園で、頻繁にツミを目撃した。8 月上旬のある日、成鳥雄が雌に餌を渡し、雌が飛んで行く先を追うと、巣を発見。雛 4 羽を確認した。以後は、夏休みの自由研究さながら、写真を撮りながら行動を記録した。

巣に雛がいる頃は、いつも特定の木(餌渡しの木)で、餌を狩った父親が母親に餌渡し。母親は、その場で雛用に調理し、巣では雛たちに均等に口移して餌を与えていた。巣立ちが近づくと、巣に餌を運び入れ、すぐに飛び去ることもあった。

巣立ち後、幼鳥は餌渡しの木で待機し、父親は幼鳥に直接餌渡し。慣れると空中で餌渡し。餌はおもにスズメだったが、この頃の観察は昼間であった。



コウモリの翼を食べるツミの幼鳥 2023.8.28 5:28 松戸市小金原

その後、日の出 10~20 分前にも毎日餌渡しがあるという情報を入手。暗いうちから観察した結果、日の出前に運んだ餌 14 の内訳は、コウモリ (13) で、ヒヨドリ (1)。ヒヨドリは前日夕方に狩ったものか。日の出直後にネズミを運んだこともあった。

巣立ちが終わると、幼鳥と親鳥は、1 羽ずつ公園から姿を消していく。最後に見たのは 9 月 4 日に、餌渡しの木にとまっていた父親。幼鳥が 1 羽、カラスに襲われて亡くなったが、それ以外はきっとどこかで元気にしていると信じている。(山田純稔)

★松戸のみどり再発見ツアーNo.63 (観察学習会)

「松戸のシンボル矢切の斜面林矢切の斜面林から里見公園へ」

矢切の斜面林を眺め、江戸川堤防沿いに栗山配水塔、坂川、柳原親水広場、フジバカマの里を訪ね、川とみどりについて考えたいと思います。

- 10 月 15 日(日) 9:30~12:30 (小雨実施) 参加費 300 円 (会員は 100 円)
- 集合 北総線矢切駅改札口 9:30 集合 持ち物 飲み物、雨具 (解散後のお弁当は自由)
- 申込み・問合せ: 090-4078-3703 (藤田 10 月 1 日から受付開始 18 時以降) ※申込制・先着 30 名
- その他 歩きやすい服装でどうぞ

緑ネット通信 No.82

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000 円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090-2935-9444

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

創造・想像を育む森の自然に魅せられて

「自然は学びの宝庫」

NPO 法人子どもっとまつど

加賀 まゆみ

NPO 法人子どもっとまつどでは長年(旧松戸子ども劇場時代含む)にわたり、子どもたちが豊かな文化環境の中で「子どもの時間」を過ごすために、子ども時代にこそ大切な「鑑賞体験」、「障がい者との交流体験」、「自然体験やものづくり体験」の様々な機会を通して、たくさんの「ワクワク・ドキドキ」に出会えることを願って、いろいろな人や団体と連携して活動を行ってきました。



その中でも、子どもにとって自然体験は欠かせない大切なものです。近年、子どもたちはバーチャル空間の中に身を置き、そしてまた、その親世代も子どもと同様に自然にふれる機会がないということを実感しています。

松戸のように農地や樹林地の宅地化が進んでいると、身近な自然を見つけることが難しくなりつつあります。

そんな人口密集地である松戸にも、里やまや樹林地が所々に点在しています。子どもっとまつどでは 10 年程前から、まつど里やま応援団の協力を得て、里やまで親子の自然体験活動を行っています。この活動のなかで、工



作、観察、収穫、虫探し、森あそび等々の体験を通して、五感を磨くこと、創造性・想像性を育むこと、多様な人々と関わることで様々な「何か」を得ることができるよう活動をしています。そして、これらの森での自然体験活動は、普段の生活の中では経験できない貴重な学びの場となっています。

しかし、年数回のしかも限られた人数での体験では十分とは言えません。そして、子どもたちがあそぶことのできる里やまや雑木林には、いつでもどこでも自由に入ることはできません。もっと多くの子どもたちが自然の中であそぶことができる場があつ



たらいいなと「あそびの森 in 囲いやま」や「ぷらっと子どもの森」を里やま応援団をはじめ、他団体とともに協働して作ることができました。

近年、土地開発により樹木伐採で失われつつある雑木林。一度失われた森林を再生するにはとてつもない長い年月がかかります。子どもたちとともに身近な自然環境を考える機会です。

生物学者レイチェル・カーソンは著書の中で「自然とのつながりは孤独や退屈を癒す、創造力や想像力を刺激する、環境意識や責任感を高める」と。「センス・オブ・ワンダー(神秘や不思議さに目を見張る感性)」を子どもたちと共に大人も一緒に自然の中で感じながら次世代に繋ぐ「小さな感性の種子」を育み、これらの活動が子どもたちの過ごせる身近で豊かな自然環境の実現につながることを願っています。

新しい森の活動が始まりました

オリンポスの山の会の活動紹介

オリンポスの山の会代表 久保 國雄

オリンポスの山の会は2023年4月から松戸新田の「オリンポスの山」で里やまボランティアの活動を開始しました。会のメンバーは里やまボランティア入門講座18～20期のメンバーが中心です。

「オリンポスの山」は、2021年から活動を始めた入門講座17期「いいなの会」が活動する「大作の森」の北側に近接している森です。面積2haと松戸市に残された森の中でも大きな森の1つです。

近隣町会の方のお話では、住宅が建ち始めた40年前頃、スギなどの針葉樹が多い森だったそうですが、時を経て植生が大きく変わり、現在ではイヌシデ、コナラ、クヌギなどの広葉樹の大木が目立ちます。

近年松戸市でも被害が広がってきたナラ枯れは大径木の多いこの森でも猛威を振るい、松戸市のナラ枯れ対策事業により今年の3月に23本の被害木を伐倒していますが、まだ20本弱の被害木が残っており今後も処理が必要です。

この森はボーイスカウト松戸第9団が約40年前から活動地・キャンプ地として利用してきています。また、

コロナ禍以前は、近くの小学校の自然観察の場、町内会のバーベキュー等のイベントの会場、テレビのロケ地としても利用されてきたそうです。



「オリンポスの山」という呼び名は、最初のボーイスカウト隊が出来た時の子供達の人数が12名であり、ギリシャ神話のオリンポス山に住まう12神になぞらえて野営場をオリンポスの山と命名したそうです。



この森は市街化区域の中にあり、森の周囲が住宅や学校に接しています。ボーイスカウトの皆さんの長年の活動によって中央通路や広場などの整備がされてきました。しかしながら、周辺部の茂みにより周囲の道路から森の中が見通せず、防犯上不安を感じる人もいます。そのこともあってか、「オリンポスの山」と「大作の森」の間の道路は小学校の通学路から除外されているそうです。

住民の皆さんに受け入れられる森を目指して、周辺部の茂みなどの整理をしながらも、森の景観や生態系にも配慮した整備が大切になると感じています。

「この森で何をしたいのか」ということについてはまだ具体的な方針はありません。活動開始時の応援団スタートアップ研修で、里やまボランティアの大先輩から、「最初の一年はあまり森をいじらず、じっくり森を観察して、森をよく知ってください」という助言をいただきました。現在は、周辺部の整備をしながら森になじみつつ、メンバーそれぞれがこの森がどのような森になるとよいか考えている最中です。来年くらいから具体的な方向性を話し合おうということにしています。

広い森です。森の中で木々の間から青空を見上げ、小鳥のさえずりを聞くと自然にすっぽり囲まれているように感じ、安らぎと覚え、心が優しくなる気がします。そんな環境を保てるように活動を続けていきたいと思っています。

みどりの拠点・金ケ作の可能性を意見交換

第2回 松戸みどりのフォーラム 金ケ作育苗圃で開催

松戸市緑推進委員 高橋 盛男

「松戸みどりのフォーラム」は、松戸のみどりや活動に「見て、触れて、語り合う」交流会。第2回を本年11月19日(日)、松戸市金ケ作育苗圃で開催しました。

「金ケ作のみどりとまちをつなごう」

「松戸みどりのフォーラム」は、松戸市緑推進委員会の企画、松戸市との共催で2019年6月29日に第1回が開催されました。「松戸市みどりの基本計画」の策定にともなう調査・研究の一環として、市内のみどり関係の活動に取り組む団体の集いとして催されました。

みどりの基本計画の策定後に企画された今回の「みどりフォーラム」は、みどり関係団体を対象とした前回とは異なり、一般市民やみどり以外の活動に関わる方々を対象としました。緑推進委員会の作業部会であるみどりのサロン部会の検討テーマのひとつが「みどりとまちをつなぐ」機会づくりであるからです。

会場の選定については、金ケ作地区が市内でも緑地の集積度が高い地域であること、同地区において現在、市の委託により千葉大学の柳井、木下、岩崎研究室が金ケ作育苗圃のリニューアルプロジェクトを展開していることが背景にあります。そして、一般の方々も立ち寄りやすいように、囲いやまの森で毎年開催され、たくさんの親子が参加する「あそびの森in囲いやま」と同日開催としました(1面参照)。

関係団体の協力で育苗圃ににぎわい

会場では、展示パネルのみどりの活動を紹介するほか、育苗圃内で活動する「松戸花壇づくりネットワーク」による輪投げ、「ハーブボランティア」によるハーブティーの提供、みどりと花の課職員による植木鉢の絵付けとなぞときクエストなどのアトラクションも用意しました。これらは「あそびの森」から立ち寄った親子に好評で、予想外のにぎわいを見せました。

一方、今回の大きな成果は、並行して開催した「金ケ作のみどり再発見ツアー&ミニワークショップ(以下、ツアー&ミニWS)」にあったと思います。



金ケ作のみどり再発見ツアーで育苗圃に到着

うれしや、予定外の意見交換会に発展

熊野神社や金ケ作自然公園など金ケ作地区の主要な緑地をめぐるこの「ツアー&ミニWS」は、招待者を対象としました。主だったゲストは地域の郷土史研究家や森林研究者、木工アーティスト、まちづくりコーディネーターなどです。直接には緑地の保全と関わっていないけれど、ふだんアクティブに活動している方々が、金ケ作地区の緑と育苗圃をどうとらえ、そこから何を感じ取ってくれるだろう。それを知ることがこの「ツアー&ミニWS」のねらいです。

さらに、このツアーには千葉大学大学院の演習にも加えられ、修士課程の学生20人と先生も参加。総勢30人を超える大ツアーになりました。ガイドを務めたのは緑ネットのメンバー。少し大変でしたけれど、いつもの再発見ツアーとは違った発見もありました。

ゲストも学生たちも、金ケ作地区のみどりの豊かさに驚いた様子です。「じっくり歩いたのは初めて」「解説付きで、歴史と緑のつながりがよくわかった」「みどりを軸にしたさまざまな可能性がありそう」など、ゲストの反応もとても良い内容でした。

コースを歩いて育苗圃に着き、簡単なアンケートをもとにしたWSを終えたあとも、ほとんどのゲストが残り、予定外の意見交換会に発展。示唆に富む多くの意見をいただきました。この成果を今後、どう生かすかが課題。意見交換会で出されたコメント等も併せ、それらについては改めてご報告いたします。

森で楽しむ音楽会 in 囲いやまの森 17年目の秋の森

10月28日(土) 囲いやまの森で音楽会が開かれました。コロナ禍で出せなかった歌声を抑え気味に響かせて、鑑賞しました。



竹ブンブンコマ、竹カエルペンダント、 シュロキングョ、竹打楽器 モリヒロフェスタで森の遊びを紹介

11月5日(日) 21世紀の森と広場で開催されたモリヒロフェスタに里やま応援団が出演。竹ブンブンコマ、竹カエルペンダント、シュロの葉キングョを子どもたちが作り、そのにぎやかさに通りがかりの親子が足を止めて、参加する光景が目立ちました。



～しぜんのコラム 56～

蟹の爪

森の維持管理作業によって出た剪定枝のこと。以前は燃料にしていたが、諸般の事情で燃やせなくなり、野積みになっていた。最後は土に帰るが、時間がかかる。置いたスペースが増えて困っていた。

救世主は、松戸みどりと花の基金が所有するチップパー(粉碎機)。2021年から使わせていただき、粉碎したチップは散策路にまいたり、梅林にまいて土壌改良に使っている。チップの一部は、まかずにそのまま野積みしているが、そこに面白いキノコが生えた。“カニノツメ”である。



カニノツメ 2023.10.23 関さんの森

“カニノツメ”の名前の由来は、もうおわかりですね。食べられるか否かが気になるが、食には適さない。毒は無いが、美味しくはない。というか臭い。子実体の上の方に、黒っぽいものが付いているが、これは“グレバ”とよばれ、胞子を含んでいる。新鮮なグレバは、ドロツとしていて、ウンチのように臭い。

多くのキノコは、風で胞子を飛ばすが、カニノツメなどの腹菌類の一部は、胞子をグレバに含ませ、悪臭でハエなどを呼びよせる。そしてハエにからだに胞子を付着させ、拡散させるのである。

(山田純稔)

★松戸のみどり再発見ツアー（観察学習会No.64）

「松戸のみどり再発見・湧水めぐりと初詣」

緑のネットワーク・まつどが主催する松戸のみどり再発見ツアーは、みどりの新たな魅力を発見する試みです。北総台地の縁だからこそみられる湧水と社寺をめぐるコースを歩き、身近なみどりについて考えます。

1月9日(火) 9:30～12:30 (雨天中止) 参加費300円(会員は100円)

集合 新京成線上本郷駅改札口 9:30 **持ち物** 飲み物、帽子、マスクは自由

申込み・問合せ：090-4078-3703 (藤田 1月3日から受付開始 **18時以降**) ※申込制・先着30名

その他 歩きやすい服装でどうぞ **歩く行程** 約2.5km